

会話分析を通しての コミュニケーション・ストラテジーの再考察 —上昇イントネーションによる確認要求のストラテジーを例に—

許 挺傑

キーワード：コミュニケーション・ストラテジー、会話分析、上昇イントネーションによる確認要求、不確実性、他者開始修復

1. はじめに

接触場面において、言語学習者は言語能力の不足により、発話の産出や相手発話の聞き取り・意味理解において、問題に遭遇することが多い。それらの問題を解決するための方略はコミュニケーション・ストラテジー(communication strategy、以下 CS とする)と呼ばれ、円滑なコミュニケーションを達成する上で不可欠な方策として注目され、英語教育のみならず、日本語教育においても、今まで多くの研究が行われてきた。(Færch and Kasper1983、Tarone1977、Bilystok1990、尾崎 1981、藤長 1996、大野 2003 など)。

それらの研究は、主に言語学習者の言語習得に関心を寄せている第二言語習得の研究者や言語教育現場の教師たちによってなされている。初期の段階では CS をどのように定義するか、どのように分類するかについての研究が中心的だったが、それ以降、学習者の使用する CS が言語能力の差にどのように影響されるかということと、CS の教育上の検討ということに関心が移り、現在に至っている¹。

第二言語習得研究や言語教育研究の領域で見られる先行研究は、言語能力の差が学習者の CS 使用にどのように影響するかを検証するため、言語能力の異なる学習者の横断的なデータを数量的に分析するという方法をとっているものが多い。それらの先行研究によって接触場面における学習者の CS 使用の形式や頻度、言語能力の差による使用の差異が明らかになるなど、多くの成果が挙げられてきた。しかし、数量的な分析だけでは、明らかにすることができない学習者の CS 使用の特徴もある。

CS がコミュニケーション上の何らかの問題を解決するためのものであるならば、それが具体的にどのような問題を、どのような形で解決しているのかということについて、単なる頻度調査だけでなく、CS が用いられている発話環境を詳細に分析することで示されなければならない。また、普段のコミュニケーションにおいてある特定の CS が頻繁に用

¹ CS 研究の歴史的な流れや研究全体の概要についてまとめたものとして尾崎(1998)、高塚(2000)、岩井(2000)などがある。ここでは十分に述べられる余裕がないため、詳細は上述の文献を参照されたい。

いられているのであれば、その用いられかたにも何らかの合理性があるであろうし、そして、その合理性とはどのようなものであるかについての説明も必要となってくるであろう。

これらの点は、先行研究でみられる頻度調査などの手法では解明できないため、会話の質的分析に適した会話分析(conversation analysis、以下 CA とする)の研究手法で、CS が用いられている会話例を詳細に分析することで明らかにする必要がある。

本研究では、接触場面における日本語学習者の CS 使用の特徴を質的に分析することで、今までの頻度調査などの研究手法では言及されてこなかった側面を明らかにする。

具体的には「語彙や形の確認要求」(藤長 1996)、「不確かさの表明」(大野 2003)などと呼ばれている CS を例に、相互行為としての会話を微視的に分析する CA の手法を用いて、当該現象の直前と直後の相互行為の特徴を含めて分析する。そうすることで、従来の研究で単なる発話産出上の語彙の問題を解決するための方略だとされているものが、実は日常コミュニケーションにおいて潜在的に存在する、方向性の異なる 2 つの課題を効率よく解決できる手段でもあるということを示す。その 2 つの課題とは、言葉選びにおける不確実性を取り除くことと、談話の進行性を最大限に維持することである。

本稿は、第 2 節で研究対象と先行研究について概観し、第 3 節で、本研究の使用するデータや研究手法について説明する。第 4 節ではストラテジーが用いられていない場合の例を検討する。第 5 節では、第 4 節の例と比較し、ストラテジーが用いられている 2 つの例(聞き手の反応が異なる 2 つの例)を詳細に分析することで、本稿の主張を行うための根拠を提示する。第 6 節では、考察のまとめと今後の課題について述べる。

2. 研究対象と先行研究

この節では、まず本稿で扱う現象について断片(1)を例に説明し、それが今までどのように説明されてきたかを概観する。

断片(1)

((この断片の直前では、X(中国人日本語学習者)は出身地での日本料理の味が本場の味と同じだということを述べている。ここはなぜ同じかについての説明部分である。))

30X : →.hh たぶん(.)う::んつく・(0.4)ん::料理の(4.0)°や°・(0.2)°やる人°?

31K : うん.

32X : °日本人です°.

X は 30 行目で説明文を産出する途中で、「°やる人°?」のように、発話文の産出を一旦止め、声を小さくして上昇イントネーションを用いて、その直前で産出した「やる人」という言葉について、聞き手に何らかの反応を要求している。K は、31 行目で「うん」を産出することで、その言葉に問題がないことを示し、話し手に発話の継続を促す。それを受けて、X は 30 行目の発話の後半と思われる部分「°日本人です°」を産出し、味が変わらな

いこと理由として「やる人が日本人です」というまとまりのある発話文の産出を終える。

本研究で注目する現象は、X の 30 行目の発話に見られる「やる人?」という発話の形式である。以下では便宜的にそれを「N?²」という記号で説明を進める。このような発話形式は、言語学習者の CS 研究において多くの研究(藤長 1996、大野 2003 など)が見られるが、母語話者同士の会話をデータとする CA 研究においても、似た現象の観察をしている研究(Sack&Schegloff1979、串田 2008)がある。

CS 研究では、たとえば大野(2003)は「N?」について、「不確かさの表明」という表現を用いて学習者が知っているけれど自信がない単語を使用するときにその単語を上昇イントネーションでいうものであるという。藤長(1996)は「N?」について、「語彙や形の確認要求」という用語を使い、使用した語彙や表現の正しさについて確認を求めるもので、単語や文の切れ目で上昇イントネーションを用い、間をとることで間接的に確認を求めるものであると説明している。

一方で、CA 研究では、発話構築の途中で、ある言葉に上昇イントネーションを付することで聞き手に何らかの反応を求めるという現象について次のような研究がある。

串田(2008)では、Sack & Schegloff(1979)を踏まえ、「認識用指示試行³」という用語を使い、日本語母語話者同士の会話データに見られる「N?」の現象について考察を行っている。それは、会話進行中に、話し手が何か新しい指示表現(人物などの具体名)を導入するときに、その指示表現について、その指示表現を用いる本題行為の語りに入る前に、会話の聞き手がどれぐらい知っているかを予備的に調べるときに使用する手段であるという。

そして、その手段の本質的な特徴として次の 2 点を挙げている。第一に、この手段は、指示者が指示表現に関する何らかの不確実性に指向していることを示すが、不確実性の種類(聞き手が対象を認識できるかどうかが不確実なのか、その指示表現の正しさが不確実なのか)を明示するものではない。第二に、この手段は、産出中の発話の統語的軌跡を変更することなく利用できる。それは本題行為のためにくみだてつつある発話の統語的軌跡を保持し、その中で指示表現を用いながら、認識探索を開始することを可能にする。

²N は名詞を意味するが、この現象は、名詞のみならず、動詞やその他の品詞にもみられる。しかし、名詞が圧倒的に多いので、N を用いることにした。

³「認識用指示試行」は、Sack&Schegloff(1979)が提示した「ある対象を指示するために利用可能な複数の指示表現の中から、いかに特定の指示表現を適切に選べるか」という問題の解決策の二次的問題に対処する方法である。ある人物を会話の中に提示するときに、「俺の友達」「JR の吉田さん」など無限の指示表現があるが、その無限の指示表現の中から、いかに 1 つの表現を適切に選択できるかという問題に対する解決策として①最小指示の選好(ただ 1 つの指示表現で指示するのがよい)②受け手デザインの選好(可能ならば、認識用指示表現を用いるのがよい)という 2 つの解決策が提示されている。「認識用指示表現」とは、指示対象を記憶の中から見つけ出すよう相手に求める性質を持つ指示表現のことで、「JR の吉田さん」がこれにあたる。一方、指示対象を記憶の中に探す必要がないことを示す指示表現は、「非認識用指示表現」と呼ばれる。「俺の友達」がこれにあたる。この 2 つの指針は、上記問題に関して、1 つの解決策を提示している。同時に「1 つの認識用指示表現によって相手が指示対象を認識できるかどうかの不確実なとき、どうしたらよいか」という問題を提起する。この問題の解決策として Sack&Schegloff(1979)は、その「認識用指示表現」に「試行標識(try-maker)」を付する手続きを示している。この手続きを、串田(2008)では、「認識用指示試行」と呼んでいる。

このように、「N?」については、CSの研究でも、CAの研究でも、ある表現に上昇イントネーションを付することで、話し手が自分の使用する表現に関する何らかの不確実性に指向していることを示す点では共通しているが、不確実性の種類に関しては、学習者の発話データを扱うCS研究では、その表現の正しさが不確実な場合に注目している。一方で、主に母語話者同士の会話データを扱うCA研究では、不確実性に異なる種類があることを述べているが、Sack&Schegloff(1979)、串田(2008)では、聞き手が対象を認識できるかどうかの不確実な場合の考察が中心となっている。母語話者の用いる「認識用指示試行」と学習者の用いる「語彙や形の確認要求」は、細田(2003)も指摘しているように、形式は類似しているが、行われている活動がかなり異なる。「認識用指示試行」は、発話者は自ら言い表している対象物を聞き手が認知できるかどうかを確かめるときに使われるのに対して、「語彙や形の確認要求」⁴は、ある語彙を発するにあたってその語彙の正確性及び適格性を聞き手に確かめる役割を担っている。

本稿の研究対象は、接触場面における非母語話者の用いる「語彙や形の確認要求」のストラテジーである。

3. 本研究の会話データと分析手法

本稿で用いる会話データは、短期留学で日本に来ていた留学生(X、L、B)と留学先の日本人学生(TかK)との2者間の自由会話のデータ(9ヶ月間の縦断的な発話データで、全部でおおよそ5時間分の会話⁵)である。文字化方法は資料を参照されたい。

本稿では、従来の研究で利用されてきた頻度調査などの数量的な研究手法をとるのではなく、CAの手法を用いた質的な分析を行う。質的分析の観点としては以下の3点である。

①「N?」の使用環境を観察し、話し手が進行中のターンを構築していく上で、ターンのどの位置で「N?」を用いるのかを記述する。

②「N?」が用いられていない発話例を観察し、そのターン連鎖の特徴を記述する。

③「N?」が用いられている2つの発話例(聞き手の反応が異なる2つの例)を観察し、②の観察と比較することで、本稿の主張を行うための根拠を提示する。

4. 「N?」が用いられていない発話例

この節では、本研究で扱う「N?」現象についての予備的な議論を行うために、「N?」が用いられていない発話例について、まずは観察することにする。

言葉を適切に使用することは日常生活において非常に重要かつ当然のことである。だが、正しいと思って使用した言葉が聞き手に正しく受け止められなかったような経験は誰にもあるだろう。断片(2)がその1例である。

⁴細田(2003)では、「語彙チェックのストラテジー」という用語を使用している。

⁵データの詳細は許(2010)を参照されたい。

断片(2)

((この断片の直前では、X は中国のお正月のため、そろそろ故郷の中国へ帰らないといけないことと、2月1日に中国へ帰ることなどを述べている。))

21X: .hh でも .hh[うん:: 1 がつ:: の: 1 がつ 2[5 にち:(.)中国のお正月、

22T: [(咳払い)) [(咳払い))

23: (1.0)

24X:→^o いやお正月じゃない^o.nka う::んきゅうりの::h 今年のさいごの:日.

25T: きゅうりの:

26X: きゅう-[k

27T: [あ·(.)<きゅう::れき>.

28X: きゅ=きゅうれき[のこ-

29T: [>きゅうり[きゅうり<というのは[()

30X: [e ききょ [h ご(h)めんね、

31: (0.2)

32X: 旧[暦の今年の[:.h] [最後の日(. hh1 月の::25 日[.hh

33T: [hehe [°きゅうり°) [(咳払い)) [あ:: そうなんだ=

34X: =でも:(0.2)イキバの試験が::hh.

X の 21 行目の「でも」は、今まで述べてきたことと何か方向性の違う事柄をこれから述べるということを投射するが、21 行目のターンの末尾まで聞いても、ターンの冒頭で用いられた「でも」の投射する話がどのような結末であるかはわからない。しかし、21 行目には重要な情報が含まれている。それは「1月25日は中国のお正月だ」という情報である。

X の 21 行目の発話に対して、T は特に反応を示していない。そして約 1 秒の沈黙を経て、X は 24 行目で、21 行目の「1月25日は中国のお正月」という発話の「お正月」の部分否定し、それを「きゅうりの今年の最後の日」に置き換えている。

24 行目のような、T にとって新情報が含まれた発話に対して、T は新情報を受け止めた反応を示していない。T は 24 行目にある「きゅうりの」という言葉を取り出し、25 行目で繰り返しているだけである。これは、話し手の発話の理解において、何らかの問題が生じ、その問題を取り除くため、聞き手が行った修復⁶の開始作業である。

そして、その修復開始の作業をきっかけに 25 行目から 28⁷行目のターンスペースが問題

⁶会話では、言い間違いや理解の食い違いなど様々な問題が生じる。このような問題が生じた場合、会話の参加者が問題の存在を表明し、何らかの方法でその問題を解決しなければならない。その方法のことを CA では「修復」という。修復は誰によって開始されるかで、「自己開始」と「他者開始」があり、さらに修復そのものが誰によって行われるかで「自己修復」と「他者修復」がある。

⁷29 行目から 30 行目の連鎖は、他者開始修復連鎖そのものとは違う連鎖のように思える。28 行目で X は、相手の修復を受け入れ、「きゅうれきのこ-」の発話を行うことで、21 行目で開始しているメインシークエンスに戻ろうとしているが、29 行目の T の「きゅうり」という発話の重なりで再び中断されてしまう。29 行で T は、ターンの冒頭で、「きゅうり」という言葉を再び用いている。「きゅうり」という言葉は、

を取り除くための作業にあてられ、結果的に話し手 X 自身が 21 行目で開始した「でも」の話は中断されてしまう。以上の観察で何が主張できるのであろうか。

会話は常に話し手と聞き手の共同作業であり、発話において、何かあるいはだれかに言及するときに用いられる言語表現は、話し手にとってのみならず、聞き手にとっても適切なものでなければならない(林 2005)。話し手にとって適切であっても、聞き手にとって適切でなければ、「え、何それ？/だれそれ？」などのような修復の措置が聞き手によって開始されることがある。そして、修復はしばしば連鎖を作る。

X の 24 行目の発話にある「きゅうり」という言語表現は、話し手自身にとっては適切な表現であった。X は 24 行目で「きゅうり」という表現を当たり前のことを言うような口調で言っていることから、その表現に問題があると認識していないことがわかる。しかしそれは、T にとっては適切な表現ではなかった。T は、本来ならば新情報を受け止めた反応を示すことが優先される位置(25 行目)で、「きゅうりの」と聞き返すことで修復の他者開始をしている。T によって開始された修復作業は連鎖(25 行目～28 行目)を作り、X の本来の話はその間中断されてしまう。

断片(2)でみた他者開始修復の連鎖を次のようにフォーマット化することができよう。

- Turn1(X) トラブルソースを含む発話(24 行目)
- Turn2(T) 不理解を示すことで、他者修復を開始する(25 行目)
- Turn3(X) 修復そのものを試みる(26 行目)
- Turn4(T) 修復が実行される(27 行目)
- Turn5(X) 修復を受け入れることで、メインシークエンスに戻る(28 行目)

断片(2)でわかるように、話し手自身が自分の使った言葉について、全く問題がないと認識している場合でも、場合によっては、聞き手にとっては不適切なものであり、聞き手によって修復を開始されることがある。そして修復はしばしば連鎖を作り、その連鎖の長さの分だけ、本題行為の進行は遅れることになる。

普段のコミュニケーションにおいて、使用する言葉が適切かどうかに関する不確実性は常に潜在的に存在する。ある言葉が適切かどうかわからない時は、より適切な言葉を使用すれば済む場合もあるが、より適切な言葉がなく、どうしてもその不確実性のある言葉を使用しなければならない時には、その不確実性を乗り除く作業が必要となってくる。

しかし、その作業は進行中の話題の維持という作業とは、方向性が異なる。この 2 つの

25 行目～28 行目までの他者開始修復連鎖を引き起こすトラブル源である。他者開始修復連鎖を終了し、メインシークエンスに戻ろうとしている X の発話に重なる形で、トラブル源の言葉を用いるということは、T は X の語りの進行とは異なる方向の話に指向していると聞くことができる。そして、これは、本来の談話をいち早く再開しようとしている X にとっては、談話を進行させる上で障害となりうる。それを阻止するために、30 行目で T の話に重なる形で「ごめんね」が用いられたと思われる。そしてその謝りが功を奏し、T が開始しようとする「きゅうり」についての話を停止させることに成功している。

作業は、潜在的に対立している。話し手が適切だと認識している場合(断片(2))でさえも、場合によっては聞き手にとっては適切でない場合がある。ましてや、話し手本人も適切かどうかわからない場合、談話の進行の維持とトラブルとなりうる言葉の不確実性を取り除く作業をいかにバランスよく達成できるかが大きな課題となるわけである。母語話者と比べ、トラブルとなりうる言葉を使用せざるを得ない時が多いと思われる言語学習者の場合、いかに方向性の異なる 2 つの作業をバランスよく行っているのであろうか。

5. 「N?」が用いられている発話例

4 節では、「N?」が用いられていない発話例を観察することで、言葉選びの適切性と談話の進行性の関係を見た。この節では話し手が発話構築の途中で用いる「N?」がいかに談話の進行性を最大限に維持しつつ、トラブルとなりうる言葉の産出によってもたらされる聞き手側の介入を最小限の範囲内に留まらせることができるかを、「N?」に対する聞き手の反応（反応が異なる 2 つの例）を観察することで示す。まず、断片(3)を見られたい。

断片(3)

((断片 1 の再掲))

30X:→.hh たぶん(.)う::んつく・(0.4)ん::料理の(4.0)°や°・(0.2)°やる人°?

31K:→うん.

32X:→°日本人です°.

ここでは、「話者交替(turn-taking)システム」(Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)の概念を用いて考察する。会話の中で話し手が常に交替しており、ある話し手が話すのを始めてから、次の話者にターンを譲るまでが 1 つのまとまりのある単位として観察でき、話者が交替することで発話の境界線が認識される。このような話者が交替する仕組みを記述したのが「話者交替システム」である。「話者交替システム」の中でも重要なのが「ターン構成要素(TCU)」と「移行適格場(TRP)」である。TCU(turn constructional unit)とは、ターン構成の単位のことであるが、それは「どのようにその単位が終わるかを投射するという性質」を有している。そして TCU の完結可能な位置において(実際に話者交替が起こらない場合もあるが)話者の交替が適切な場所が「移行適格場(TRP: transition relevant place)」となる。

X は 30 行目で、まずターンの冒頭で「たぶん」と言って、すぐに、「う::ん」のように言いよどみ始めている。このことから、X が発話産出上の何らかのトラブルが生じたことが分かる。言いよどみのあと、X は「つく・」を次の位置で産出する。これはおそらく「料理をつく・(る)」という言葉の産出しようとしたのであろう。だが、それも途中で X 自身によって中断され、ふたたび言いよどみに入る「ん::」。そして、次のところで、発話の組み立てなおしを開始し、「料理の」と言って、約 4 秒もの沈黙を経て、30 行目の最後に「や

る人?」を産出している。これは、X 自身による自己開始の修復であり、「料理をつく(る人)」という表現を「料理をやる人」という表現に置き換えている。そして、最後に「やる人」の後ろに上昇イントネーションを付することによって、聞き手に自分の使った言葉に何らかの不確実性があることを示し、聞き手に反応を求めている。

30 行目の発話の組み立て方を TCU の構築という観点からみると、表現形式的にも未完成であるし、語りという行為の面からみても、語りがそこで終了したと見なすことが難しいことがわかる⁸。つまり、30 行目の「やる人?」の時点では、まだターン構築(TCU)の途中であるということである。このような位置では、聞き手が話し手のターンを終了させ、自分のターンを開始することは、普通はしないであろう。

だが、ここでは、聞き手の K は、普通ならば「相づち」のような発話類しか許されない環境で「相づち」以上の働きを果たす「うん」を産出している。ここでの「うん」は、「先行話者の話を聞いている、理解している」といった典型的な「相づち」の機能ではなく、話し手の確認要求に対して、確認を与えるという働きをしているのである。

そして、この「うん」を聞いた話し手 X は、聞き手にとっても「やる人」という表現には問題がないことを知り、次の行で、「日本人です」という「名詞+コピュラ形式」の表現のみを産出している。あえて直前の表現に依存するような形で、「日本人です」という表現を産出することで、X 自身の 30 行目の「やる人?」という表現とリンクを作り、最終的に「味が同じなのは、やる人が日本人だからだ」という説明の発話を完成する。

このように X は、TCU 構築の途中で、その構築を一旦停止し、その直前で使用した言葉の適切性に関して何らかの問題があるかもしれないということを自ら上昇イントネーションを付することによって、あえて聞き手から何らかの反応を誘い出す。そして、聞き手の K は話し手の要請に応じる形で「うん」と言って、話し手の使用した言葉に問題がないことを示すことで、語りの継続を促すという一連の相互行為の連鎖が成立している。

この節の目的は、話し手が発話産出の途中で用いる「N?」がいかに関話の進行性を最大限に維持しつつ、トラブルとなりうる言葉の産出によってもたらされ得る聞き手側の介入を最小限に抑えることができるかを示すことにあるが、断片(3)では、「N?」を用いることで自分の談話の統語的軌道を変えずに言葉の適切性に関する不確実性を取り除くことができたと同時に、トラブルとなりうる言葉の産出によってもたらされ得る聞き手側の介入を「うん」という小さい言語的要素による介入に抑えることができた。

TCU 構築の途中で、問題となりうる表現を自ら「N?」を用いて有標化し、聞き手に何らかの反応を求めることで、いわば聞き手に「N?」の置かれた環境⁹(話し手はまだ TCU

⁸西阪(2008)も参照されたい。

⁹単なる「話し手の TCU 構築の途中という発話環境」のみならず、会話に参加している話し手と聞き手の属性なども環境になりうる。串田(2008)では、「N?」は指示者が指示表現に関する何らかの不確実性に指向していることを示すが、不確実性の種類(聞き手が対象を認識できるかどうかの不確実なのか、「N って知っている?」と言い換え可能、その指示表現の正しさが不確実なのか、「N という表現であっている?」と言い換え可能)を明示するものではないとしている。しかし、たとえば、断片(3)の「やる人?」と 5.1 節

構築の途中であり、重要な情報がまだ後ろにあるなど)を踏まえるように仕向け、話し手の目的¹⁰に合った振る舞いを要請する。つまり、ここでの話し手は聞き手に非常に縛りのある条件付きの参与権限しか与えていない。それによって、その時点で新たな連鎖を開始することを差し控えるように聞き手に仕向けるのである。

5.1 「N?」に対して異なる反応を示すもう1つの発話例

この節では、前節で述べた主張を、違うタイプの実例を挙げることでさらに補強する。TCU 構築の途中で用いる「N?」に対する聞き手の反応が、すべて断片(3)でみるような最小限の肯定的な反応であるとは限らないため、「N?」の使用に対して、聞き手が異なる反応を行った場合のターン連鎖の特徴も見ておく必要がある。

断片(4)

((この断片の直前で、X は一週間の日本旅行で訪れた場所などを列挙しながら、訪れた場所の出来事を語っている。この断片はその続きである。))

01X: ん…あと…はん…ええと (2.0).hh なんか大阪:で:ええ (1.0)午前中?

02: (.)

03X: 午前中ぐらい .hhh ん… しょく:(1.6) しょくよ ku·shi ん:

04X:→ひる?=ひるしょく?

05T:→ちゅうしょく[:

05X:→ [>ちゅちゅうしょく<(.)ちゅうしょくを食べて:

06X: .hh なんか彼氏が:飛行機で:中国へ帰ったんだ。

X は 04 行目の冒頭で「ひる」という言葉に上昇イントネーションを付しているが、早いスピード¹¹でそれを訂正し、「ひるしょく」に言い換えたうえで、再び上昇イントネーションを付している。03 行目の後半にある「しょく」という言葉を、上昇イントネーションを付せずに産出していることから、「しょく」という言葉にはとくに適切性に関する不確実性は感じていないことがわかる。X は、「ひるしょく」という言葉そのものの適切性に関する不確実性を感じているというより、「ひるしょく」の「ひる」の部分に不確実性を感じているのではないかと考えられる。

の断片(4)「ひるしょく?」のように、日本語非母語話者である X が日本語母語話者に対して言った場合、「やる人って知っている?」「ひるしょくって知っている?」より、「やる人という表現であっている?」「ひるしょくという表現であっている?」と解釈されるのが自然であろう。このように、「N?」というストラテジー自体は、不確実性の種類を明示しないものの、「N」や会話参加者の性質などが不確実性の種類を特定する上で非常に大きなヒントとなりうることを強調しておきたい。

¹⁰「N?」というストラテジーが形式的に「説明」ではなく、「確認」を求めるような形となっているのも重要である。この点も、聞き手の反応に影響していると思われる。

¹¹上昇イントネーションが見られるが、非常に早いスピードで次の発話を産出していることがわかる。このやり方はまるで聞き手に反応の隙間すら与えないようなやり方である。

実際、聞き手も正確に話し手の問題がどのような問題であるかを察知し、すぐその次の位置で的確にその訂正作業を行っている(ひるしょく→ちゅうしょく)。

そして、05 行目で話し手は、04 行目の聞き手の訂正が完全に終わらないうちにその訂正を受け入れ、非常に早いスピードで「>ちゅちゅうしょく<」を産出している。そして、その後普通の発話スピードに戻り、「ちゅうしょく」をもう一度繰り返して、「を食べて:」を産出することで、03 行目での語りの継続を再開している。この断片は次のような特徴がある。

1 つ目は、TCU 構築の観点から見ると、断片(3)と同じように 04 行目の「ひるしょく？」を産出した時点では、まだ TCU の途中であり、話者交替をしてもいいような位置ではない。なぜなら、断片(4)では、1 つの出来事を語ろうとしているが、01 行～04 行までは「大阪」、「午前中」、「ひるしょく」という 3 つの実質的な情報しかなく、出来事そのものについての記述(述語部分)がされていないのである。このような位置では、話し手の語りの継続を促す聞き手の「相づち」のような発話類しか許されない位置であるため、聞き手が話し手のターンを中断させ、勝手に自分のターンを開始することは普通しないであろう。

2 つ目は、断片(3)と同じように「ひるしょく？」を産出するまで、言いよどみや沈黙、自己開始修復等の発話産出の困難さを示すシグナルがある。これらのシグナルで、聞き手は話し手がどのような発話産出の困難に遭遇しているかをある程度予測できるようになる。

3 つ目は、断片(3)と同じように、聞き手は次の位置で何らかの反応をしており、話し手がそれを受け入れることで元の語りの継続を再開している。

一方、断片(3)と断片(4)で異なる点もある。断片(3)では、聞き手は次の位置で「N?」の「N」に問題がないことを示す標識「うん」という反応を示しているが、断片(4)では「うん」ではなく、「N?」の「ひるしょく」を「ちゅうしょく」に置き換えている。

断片(4)では、結局 X が 03 行目で使用した「ひるしょく」という言葉が T によって不適切な言葉であると扱われることになる。しかし、そのような場合でも、発話の連鎖構造上、断片(3)と何ら変わりはない。

一方、断片(4)の 05 行目での T による介入は、断片(2)と同じく他者による修復であるが、連鎖の構造が異なる。断片(2)の場合は、もとの TCU に戻るまで 3 行のターンスペース(25 行目～27 行目)が言葉の適切性の問題にあてられたが、断片(4)の場合では、同じ他者による修復であっても、言葉の適切性の問題にあてられたのはわずか 1 行のターンスペース(05 行目)である。断片(3)、(4)に見られる発話連鎖をフォーマット化すると以下ようになる。

Turn1(X) トラブルとなりそうな語+「?」という形で相手の反応を誘い出す。

Turn2(T) 話し手の反応要求に応じ、必要な反応を示す(肯定か修復)。

Turn3(X) 肯定であれば、そのままメインシークエンスに戻る(断片 3)

Turn3(X) 修復であっても、修復を受け入れることでメインシークエンスに戻る(断片 4)

話し手は TCU 構築の途中で「N?」のような小さい要素を用いることで、聞き手に自分の要請する範囲内(条件付きの参与権限)で協力してほしいということを示す。このような要請があるからこそ、普通であれば、「相づち」のような発話類しか許されない TCU 構築の途中という位置で、聞き手の「相づち」以上の反応が可能となる。その要請とは、TCU の構築がまだ途中だという発話環境を踏まえ、「N?」の「N」に問題がなければ、なるべく最小限の反応でそれを明示せよということと、問題があれば、なるべく最小限の反応でそれを修復せよということである。だが、肯定的な反応であれ、他者による修復であれ、話し手がその反応の次の位置でターンを再開することは可能である。

このことが可能なのは、実はこの局所で行われる話し手と聞き手のやり取りがある意味では隣接ペアのような性質を有しているからである。隣接ペアを構成するのは、ターンであり、完結可能点に達した 1 つの TCU でなければならないが、本研究での聞き手の反応は、自分が次話者としてターンをとっている参与の仕方とは違い、話し手の発話権を認識しながら話し手によって用意された相互作用の空間を利用して話し手のターンに一時的に介入したものである。このような TCU 内部でも、「確認要求→確認与え」からなる隣接ペアのような聞き手の出方を強く制限する交渉が見られる¹²。

CA では、話者交替が適切となる場所が「移行適格場(TRP)」と呼ばれている。しかし、本研究で見た断片(3)、(4)ともに、TRP でない場所で、つまり表現形式的にも、TCU 構築の上でも未完結な場所¹³で話者の交替が起きている。

TCU 内部にみられる話者交替の現象について、岩崎(2008)は会話における「引き込み」現象の考察から、TCU 内部においても、聞き手の介入を適切にする場があることを示し、その場を「他者介入適格場(intervention relevance place)」と呼び、その特質を以下のようにならべている(p181)。

「移行適格場」で話者の交代が適切となるように、完結可能点以前の TCU の内部で「他者介入適格場」が、話し手のある振る舞いによって開始されることにより、「相互作用空間(interactive turn space)」が用意され、聞き手の介入が適切となる。これは一つの TCU の内部で開始される受け手との相互作用の空

¹²断片(3)、(4)で示しているような「肯定的な反応」と「他者による修復」という反応以外にもう 1 つの反応が観察された。それは学習者の「N?」に対して、母語話者が「修復の開始」(N を上昇調で繰り返す)を行うという反応であった。しかし、これは学習者の「N?」の音声小さかったためにとられた行動であり、反例にはならないと考えられる。なぜなら、どのような隣接ペアの第 1 対に対してもデフォルトの反応以外に、第 1 対の理解に問題が生じた際に行う「修復の開始」作業は常に可能であるためである。

¹³このような発話構築の途中という場所とは、表現形式的に未完結な場所であり、TCU 構築の上でも未完結な場所である。このような場所を西阪(2008)では、「反応機会場」と名付けている。本稿で観察した「N?」によって生じる位置というのも、表現形式的にも、TCU 構築の上でも未完結な場所であるという点からみれば「反応機会場」となるが、しかし、西阪(2008)本人も述べているように、「反応機会場」は、あくまでも反応の機会が与えられている場所であって、反応が特に期待されているとは限らないということ考えると、本稿のような現象は、「N?」を用いることで特に聞き手の反応が期待されている場所であるため、「反応機会場」というよりも、「反応要請場」といったほうがより適切であろうと思われる。だが、用語の混乱を避けるため本稿では、そのような場所については、後ほど述べる岩崎(2008)の用語を援用することにする。

間であり、今産出されつつある発話に聞き手が作用を及ぼすことができる場所である。その相互作用空間で聞き手は話し手の発話を完結に向かって導くための「積み木」(building-block)となる構成素を提供することが求められ、あるいは、可能となる。

本稿で観察した現象も岩崎(2008)で指摘された現象の1つであると思われる。

TCU の内部において、話し手が「N?」を用いることでターン保持者の発話権を一時的に和らげ、「他者介入適格場」を用意する。その場(相互作用空間)においてのみ、聞き手の介入が可能となる。そのため、話し手は発話構築の途中で、談話の進行性を最大限に維持する仕事と、言葉選びの適切性に関する不確実性を取り除く仕事という方向性が異なる仕事をバランスよくこなすことができる。

このように TCU 構築の途中でトラブルとなりうる言葉の産出を、「N?」を使用することで有標化し、それによって聞き手から必要な反応(修復の場合もある)を誘い出す。そして、そのような誘い出しをわざわざ行うことで、逆にその反応をあくまでも話し手のコントロールの出来る範囲内にとどめることができたわけである。

言いよどみとしての「あのう」について分析した西阪(1999)は「あのう」によって有標化することにより、話し手の発言が「受け手に合わせたデザイン」に関して問題のあることを公然化する。そのような発話は、しかるべく「修復」されるよう、いわば予定された組み立てになっていたのである」と指摘しているが、これは本研究で観察した現象の説明にも通じる点があるのが興味深い。

また、「N?」のストラテジーは、「N」という言葉が適切かどうか分からないという話し手自身の認識も有標の形で示しているため、トラブルとなりそうな言葉の産出の背後には、何らかの事情やあるいは何か合理的な理由がある(断片(3)(4)の場合、言葉探しなどが見られるように、話し手はそこで自分のベストを尽くした)という期待を持たせることができる。その行為を行うことで、仮に何らかのトラブルが発生したとしても、トラブルの発生は決して故意ではなく、自分のコントロール外のことであり、そのような危険性を冒してまで、話し手は現在の聞き手とのコミュニケーションを継続させることを優先していること、自分は言語能力の発達が途上であるというハンディを抱えながらも、相手とのコミュニケーションを継続する上で十分な能力を有していることを主張できるという点が CS としての「N?」の相互行為上の意義であろう。

6. まとめと今後の展望

本稿では、従来第二言語習得研究の領域で多くの研究がされてきた CS の1つ「語彙や形の確認要求」(「N?」)について、使用の頻度などの数量的な特徴ではなく、CA の手法を用いて、このストラテジーの相互行為上の特徴と使用の意義について論じた。その結果、このストラテジーは、先行研究で言われているような、単なる発話産出上の語彙の問題を解決するためのものだけでなく、相互行為を行う上で常に存在する方向性の異なる2つの

課題を効率よく解決できる手段であることが明らかになった。この戦略は、言語使用における言葉の正しさに関する不確実性を解消するとともに、聞き手に他者介入適格場での条件付の参与権限を与えることで、聞き手の次の出方がある程度話し手のコントロールの範囲内で制限する働きがあり、そして、その働きが結果的に話し手の話題の維持に貢献している。さらに、「N?」を行うということ自体が発話のトラブルの可能性を有標化する行為であるため、話し手がトラブルの危険性を冒してまで、現在の聞き手とのコミュニケーションを継続させるという方向を優先していること、自分は困難を抱えながらも成員の一員として十分な能力を有していることを主張できる点が、発話産出上何らかの困難を抱える会話参加者にとって非常に重要な意義を持つことを指摘した。

今後の課題であるが、本研究で見た「N?」の現象は、不確実性を帯びる言葉を、上昇イントネーションで試行的に提示するという特徴がある。この現象は、北野(2005)でいう「試行的提示」という現象の1つであると思われる。北野(2005)では「...というか」「...ですか」などを、独話のデータを用いて考察を行っているが、今後の研究課題として試行的提示発話の諸形式間の比較や、他言語との比較が必要であると述べている。「N?」「...というか」「...ですか」のような「試行的提示」に関しては、未解決な課題が多く、今後より多くの研究成果を期待できる研究領域となるであろう。

このように従来の第二言語習得研究や言語教育研究に見られる数量的な分析と異なるアプローチを用いることで、今までの研究で見落とされていた学習者のCS使用の相互行為上の特徴を示したことに意義があると考えられる。接触場面の研究は、数量的な研究方法のみならず、質的な分析も非常に重要である。また、接触場面に観察される現象を、接触場面の研究に留まらず、関連現象(北野 2005、串田 2008、西阪 1999)と関連づけて体系的に論じていくことも、今後のより豊かな研究領域構築のために必要なことであろう。

<付記>

本稿は 2011 年中国天津で行われた「日本語教育国際研究大会(International Conference on Japanese Language Education)」にて発表した内容に加筆・修正したものである。

【参考文献】

- 岩井千秋(2000)『第二言語使用におけるコミュニケーション方略』溪水社。
- 岩崎志真子(2008)「会話における発話単位の協調的構築—「引き込み」現象からみる発話単位の多面性と聞き手性再考—」串田秀也・定延利之・伝康晴 編『「単位」としての文と発話』ひつじ書房,169-220.
- 大野陽子(2003)「初級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー—「発話ストラテジー」使用についての一考察—」『三重大学留学生センター紀要』第5号,55-65.
- 尾崎明人(1981)「外国人の日本語の実態(2)上級日本語学習者の伝達能力」『日本語教育』45号,41-52.

- 尾崎明人(1998)「異文化接触場面のコミュニケーション研究と日本語教育—コミュニケーション・ストラテジー研究の概観—」『日本語教育通信』32号,12-13 国際交流基金.
- 許挺傑(2010)「日本語学習者の発話ストラテジーについての一考察—第二言語習得環境にいる中上級学習者の縦断的データを用いて—」『筑波応用言語学研究』17号,111-124.
- 串田秀也(2008)「指示者が開始する認識探索—認識と進行性のやりくり—」『社会言語科学』第10巻第2号,96-108.
- 高塚成信(2000)「コミュニケーション・ストラテジー方略研究の現状と課題—Kasper and Kellerman(eds.)(1997)が示唆するもの—」『岡山大学教育学部研究収録』第114号,81-90.
- 北野浩章(2005)「自然談話に見られる逸脱的な文の構築 試行的提示のための形式「...と言うか」「...ですか」など」串田秀也・定延利之・伝康晴 編『「活動」としての文と発話』ひつじ書房,91-121.
- 西阪仰(1999)「相互行為の資源としての言いよどみ」『会話分析への招待』世界思想社,71-100.
- 西阪仰(2008)「発言順番内において分散する文—相互行為の焦点としての反応機会場—」『社会言語科学』第10巻第2号,83-95.
- 林誠(2005)「「文」内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって—」串田秀也・定延利之・伝康晴 編『「活動」としての文と発話』ひつじ書房,1-26.
- 藤長かおる(1996)「初中級日本語学習者のコミュニケーション能力についての一考察—話し手としてのコミュニケーション・ストラテジーの考察—」『日本語国際センター紀要』第6号,51-69.
- 細田由利(2003)「非母語話者と母語話者の日常コミュニケーションにおける言語学習の成立」『社会言語科学』第6巻第1号,89-98.
- Bialystok,E.(1990) *Communication Strategies: A Psychological Analysis of Second-Language Use*, Oxford:Blackwell.
- Færch,C&Kasper,G.(1983)Plans and strategies in foreign language communication. In C.Faerch & G.Kasper(eds.),*Strategies in Interlanguage Communication*,20-60.London: Longman.
- Sack,H.&Schegloff,E.A.(1979) Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In Psathas, George(eds.),*Everyday language: Studies in ethnomethodology*,15-21.New York : Irvington.
- Sacks,H.,Schegloff,E.A.,&Jefferson,G.(1974) A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
- Tarone,E.(1977)Conscious communication strategies in interlanguage.In H.Brown,C.Yorio &Y.Crymes(eds.),*On TESOL 77*,194-203,Washington D.C:TESOL.

資料：文字化方法

[複数の参加者の発する音声为重なり始めている時点である。

(.)	0.2 秒以下の短い間合い。
言葉::	直前の音が伸ばされている。コロンの数はその相対的な長さである。
言・	言葉が不完全なまま途切れている。
<u>言葉</u>	音の強さ。
→	注目する発話。
.h	呼気音。 .h の数は音の相対的な長さである。
(())	発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。
.	語尾の音が下がって区切りが付いたこと。
◦ ◦	音が小さいこと。
=	2 つの発話が途切れなく密着していること。
><	発話のスピードが目立って速くなること。
hh	笑いを表す。
ローマ字標記	仮名表記にできないような音。